

NPO法人

全日本語りネットワーク

〒185-0021 東京都国分寺市南町2-18-3

国分寺マンションB-03A

(FAX) 0237-67-7001

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(振替) 00130-2-114808

2022. 4. 24 発行

ニュース

紙芝居の魅力、そして「全日本語りの祭り」へ

佐藤まもる(神奈川県横須賀市 ヨコスカ・三浦半島 紙芝居ネット 事務局長)

ふと、紙芝居の魅力って何だろうと思ひ、5つ挙げてみることにした。①生身・生声 ②日常の中につくられる非日常 ③いろいろな抜きの楽しさ ④絵が語る・動く・飛び出す ⑤観客と観客の交流の5つになった。

①の「生身・生声」について。ぼくは、このごろ人形劇を観る機会が多い。人形劇は生声で演じられることがほとんどであり、とても落ち着くし、集中できる感じがある。小さい子どもは、ママの生声で安心するだろうし、カウンセリングのような面接も生声だから癒されると思う。マイクを通した声、機械音ではない生声が紙芝居の魅力だと思う。さらに、手づくり紙芝居では、プラス「生絵」なのも魅力である。

②の「日常の中につくられる非日常」について。旅行、映画、テーマパーク、劇場など、非日常で人は元気になり、明日への活力となる。紙芝居は保育園など生活の場で演じられることが多いので、日常と非日常性のはざまにある文化だと言える。そこで、紙芝居舞台(以下「舞台」)が非日常への架け橋になる。保育士などの大人が、いつもと違った声を出すことで、より日常から離れると思う。ぜひ、舞台を使う、幕紙を使う、テーブルに布をかける、周りを少し暗くして紙芝居を照らすなどにより、非日常を演出して欲しいと思う。

③の「いろいろな抜きの楽しさ」について。紙芝居は日本発祥の文化である。舞台の紙を抜く部分を見て連想するのは敷居である。紙芝居の発想は、襖が影響しているのではないかと勝手に思っている。紙芝居では、「さっと抜く」「ゆっくり抜く」「途中で止める」「ゆらしながら抜く」「抜いたものを戻す」「2枚一緒に抜く」など様々な抜き方を楽しめる。

残りの2つは、オンライン配信との関係でお話ししたい。コロナ禍になり、文化芸術のオンライン配信が盛んに行われている。自宅で見られる、全国各地を繋ぐことができる、オンデマンドだと止められる・何度も見られるなど便利な点があり、研修会や合評会ではメリットも大きいと思う。2月には、担当した方の細やかなご配慮により、「ほかほかぼかぼか 語りと紙芝居の会」に出演させていただき、楽しむことができたのは有り難かった。

紙芝居のオンライン配信については、①「生身・生声」は当然あきらめるしかないが、特に④「絵が語る・動く・飛び出す」と⑤「観客と観客の交流」が厳しい。故右手和子さんなど名人が演じる紙芝居は、本当に絵が語り、動き、飛び出すのを感じた。それは、演じ手の語り・身体・絵・舞台の一体感が成し得たのだと思う。オンラインでは、絵だけが映って演じ手は映らなかつたり、絵と顔だけだつたり、舞台の一部が画面から切れていたりする。そして、絵が語る・動くまでの躍動感は見られず、画面からこちら側には絵が飛び出して来ない感じがする。そして、周りの人が笑ったらつられて笑ったとか、周りの子どもの反応が面白かったとか、観客相互の交流は生じ得ない。

オンラインは個別的な文化ほど有効であり、語りや落語は適性があるとも言える。しかし、残念ながら限界があると思う。観客は、語りを聴いているだけではなく、語り手の雰囲気やオーラ、会場や客席やのムードを含めて、声、顔、身体、しぐさ、服装、時には楽器演奏を体感して心を動かすのではないだろうか。2018年に那須高原で開催された「全日本語りの祭り」に初めて参加した。生の語りの感動、余韻は今でも残っている。今年は、4年ぶりに石川県で開催される。心の師である野間成之さん(のまりん)がお住まいの地である。コロナ禍を生き抜き全国から集うことに、とても大きな意味を感じる。新たな出会い、語りのライブを楽しみたい!

